

英米文化の背景 「英米人の迷信・俗信」考 (6) III 恋と結婚

—その1 恋占いと結婚占い

藤高 邦宏

倉敷芸術科学大学教養学部

(1997年9月30日 受理)

はじめに

いつの時代、いずれの国の人々にとっても、恋と結婚は人生の一大関心事であろう。欧米の人々の間では一般に、恋が実って結婚に至るといふごく自然な成り行きが見られるところから、恋占いと結婚占いとは大いに結びつきをもっていると言えよう。当稿ではこれらの占いの一般的なものをとり上げて、英米文芸上の用例をも挙げつつ考察を試みたい。

1 恋占いと結婚占い

これらの占いに関しては、現在恋人がいる者にとっての占いと、現在恋人はいないが将来恋人ができ結婚するのを期待する者にとっての占いとで、二つに大別できよう。

[A] 現在、恋人、あるいは心に留める異性がいる者にとっての占い

(1) 相手の心、誠実さ等を知る占い

相手の心を占うごく簡単な方法の一つに、花の花弁を数える方法がある。

*タンポポ (dandelion) の花弁を一枚一枚むしり取りながら、女性の場合なら、"He loves me. He loves me not." (愛してる。愛してない。) と繰り返す、最後の花弁がどちらの文句に相当するかで占う。このいわれは、タンポポの花言葉が〈予言〉であることが関係しているとも言われる。ここで使われる文句はまた、デートの約束をした場合などに、彼が現れるか、現れないかの文句にも置き換えられる。I. Opie と M. Tatem は W. B. Scott, *Poems* の次の用例を紹介している。

Will he come? I pluck the flower-leaves off, / And at each, cry, yes, no, yes - I blow the down
from the dry hawkweed, / Once, twice, hah! it flies amiss!¹⁾ (あの人は来るかしら。私は花びら
らを摘み取り / その度毎に叫ぶ。来る、来ない、来る - 私は乾いたヤナギタンポポの
冠毛を吹き飛ばす。 / 一度、二度、ああ! それだって変なふうには飛ばわ!)

* (上記のように) タンポポの綿毛を口で吹く占いがある。うまく飛ばば吉とされる。

* デイズィ (daisy) も花卉をむしり取る方法で同様の恋占いに用いられる。この花は一般に〈純潔〉の花言葉を有し、恋占いには向いていると言えよう。しかし、その一種ミクマスデイズィは遅咲きのせいからか花言葉が〈別れ〉である—これは恋占いが否と出た場合の結果と結びつくであろう。イギリスのデイズィは日本のもののように色とりどりでなく、芝生の間にまるで星をちりばめたように点々と咲く白い可憐な花である。花びらをむしり取りつつ、
“Does he love me? —much—a little—devotedly—not at all?” (あの方は私を愛しているかしら—大いに—少し—心から—全然。) と繰り返し、やはり最後の花びらに相当する文句で、相手の自分に対する愛情の度合いが占われる。‘daisy’ は ‘day’s eye’ [=the sun] から生じたと考え、G. Chaucer はこの花を「花の女王、花の中の花」(‘the emperice and flour of floures alle’) と呼んでいる²⁾。

* マリーゴールド (marigold) は、日本ではセンジュギクと呼ばれ菊の一種とされるが、これも同様に花びらをむしり取りながら数え、恋占いに用いられる。この花はもと花の黄色が「黄金」を思わせることから、ただ ‘gold’ と呼ばれていたらしいが、その気高い美しさが聖母マリアと結びつけられ ‘marigold’ と呼ばれるようになったとも言われる³⁾。T. F. T. Dyer は、この花の一般的な名が ‘mary-bud’ であったとし、W. Shakespeare, *Cymbeline* の用例を示している⁴⁾。因みに、マリーゴールドの花言葉は〈悲しみ〉(grief) である—恋はおいおいにして「悲しく痛ましい」(‘grievous’) 結末と結びつくせいであろうか。

花びら以外に、果実の種、植物の葉、その他ボタン等が用いられる恋占いもある。

* スモモ (plum), サクランボウ (cherry) 等の種を数える。

* シダ (fern), ツタ (ivy) 等の葉を数える。

* 服のボタンを用いる。チョッキのボタンを数えるとき、上からと下からと両様ある。

* 縄跳びをしながら「愛してる。愛してない」と交互に数える。

* 麦の葉を2枚重ねて娘の腰に9回巻きつけながら恋人の名を繰り返す占いがある。2枚の葉がくっつけばその娘の恋人は本物だと判じられる⁵⁾。

ここでの「9回巻きつける」の「9」の数は、以下で扱う占いでしばしば出てくる特別な数である。9は完全数と呼ばれる3の3倍の数で〈完璧〉を表す⁶⁾という点から、それは完全さが最大限に強化されたものだと言えよう。この徹底的な完全さこそは、占いという一種の魔術にとって不可欠の要素なのではないかと考えられる。Zolar は「9は治療術や占術において大いに用いられる数である」と記している⁷⁾。なお男女のことを占う点から2の数と、それに完全数3も、併せてよく用いられるようである。

火の中に果実の種を入れ、そのはじけ方や燃え方で相手の自分への愛情度を測ろうとする占いがある。これはかつてはハロイーン(十月三十一日)の夜の占い遊びとしてよく行われた。

* リンゴの種かクルミの種を暖炉の火の中に放り込み、こう唱える。“If you love me, pop and fly, / If you hate me, lay and die.” (もしも私を愛しているのなら、ポンとはじけて飛んどくれ。／

でなけりゃ、そのまま死ぬがいい。) このとき相手を思い浮かべて語りかけたり、名を呼んで占う。種が音を立てて破裂して飛ばば吉で、相手に愛されているとされ、燃えてしまえば凶とされる。これはイングランドでの占い方である。

2人の異性のうちどちらが自分を愛しているかを知る占いがある。

*リングの種を2つ用意し、2人の異性に見立ててそれぞれ名をつけて、1つずつ両頬または額に押しつけてくっつける。はがれ落ちないほうの種に当たる人物こそが、自分を真に愛している恋人と判定される。

(2) 恋が実り、結婚に至るかどうかを知る占い

*リングの種を2つ互いに触れるように並べて暖炉の火に入れる。娘は左手の種を自分とし、右手の種を相手の男性とする。2つともはじけて同じ側に飛ばば結婚することになるが、反対側に飛ばば結ばれない。また、共に燃えてしまえばその男性は求婚することもない。これはイングランド北西部、特にランカシア州に伝わる占いである。

*スコットランドでは、ハロイーンの夜にハシバミの実を2つ用意し、男女が自分たちの愛が実るかどうかを占う。2つの実を暖炉に投げ入れ、実がはじけて飛ばば凶、静かに並んで燃えれば吉とされる。ところで、スコットランドのこの占いの吉凶の判定の仕方については、前述のイングランドのそれとは逆になっていることが注目されよう。

*ツタの葉を2枚用意し、先が尖った葉を男性、先の丸い葉を女性と見立てて並べて火の中に入れる。もし2枚が向き合って飛ばば二人は結ばれるが、それぞれ反対方向に飛ばば二人の恋は成就しないと占われる。これはウェールズで見られる占いである。

*月桂樹の葉に恋人のイニシャルをひっかいて書き、自分の靴の中に入れて身につけ、夜も靴の中に入れておく。朝、イニシャルが前よりはっきりしていれば結婚は可とされる。

*聖書と鍵を用いて娘の結婚の可否を知る占いがある⁹⁾。聖書の『雅歌』または『ルツ』の箇所、鉄製の鍵を鍵輪がページの外に出るようにはさみ込み、右ガーターで聖書を縛る。2人の者が鍵輪に指(中指)を入れて聖書をぶら下げ、“Many waters cannot quench love, neither can the floods drown it.”⁹⁾(大水も愛を消せず。洪水も愛を押し流し得ない。)と『雅歌』(Ⅷ. 7)を朗読する。このとき聖書が回転すれば(あるいは落ちれば)娘は結婚が可とされ、もし朗読中に何も起きなければ結婚は否とされる。またイングランド東部地域では、聖書が左に回転すれば恋人は移り気であり、右に回転すれば恋人は本物だと占われる。因みに、この占いは泥棒犯を見つけるためにも用いられ、OpieとTatemはR. Scot, *Discoverie of Witchcraft* (XII)の用例を紹介している¹⁰⁾。

[B] 将来における恋と結婚についての占い

(1) 結婚の時期、またその順番等を知る占い

*スモモの種やサクランボウの種等を用いて、“This year, next year, some time, never.”(今年、

来年、いつか、だめ。)と繰り返し数えて、最後の種がどの文句に相当するかで判じる。

*カッコウ鳥の鳴く数で占う方法がある。一般的には、春最初に聞くカッコウの鳴き声の回数が結婚までの年数とされる。また一部には、カッコウの鳴き声を聞いたらすぐに、“Cuckoo, cherry tree, / Good bird, tell me / How many years I shall be / Before I get married?” (カッコウ、サクらの木、/ 良い鳥よ、教えておくれ、/ あと何年でしょう、/ 私が結婚するのは。)と問う。応えて鳴く声の回数とその年数とされる。

*糸に吊したリングがクリスマスの結婚占いに用いられる。サセックスでは、独身男女が各自リングを糸に通して暖炉の前でくるくる回し、リングが早く落ちた者から順に結婚すると言われる。最後までリングが落ちない者は生涯独身で通すことになることとされる。

*トネリコ (ash) を用いた結婚占いがある。例えば「トネリコの薪束」(‘ashen faggot’) と呼ばれる占いがある。この占いでは、クリスマス・イヴにトネリコの枝の大きな束が薪の代わりにされ、乙女はそれぞれの束を選んでおく。縁起を担いで前年の束の切れ端でそれに火がつけられ、選んだ束のひもが一番に切れた乙女が最初に結婚するとされる¹¹⁾。

(2) 相手の容姿、風采等を知る占い

イングランド北部には、聖マルコ祭 (四月二十五日) の前夜になされる占いがある。

*夜、古い教会に行き玄関で瞳を凝らして見ていると、将来の伴侶の姿が見えると言われる。
*夜、教会の庭で (周囲で) 左肩越しに (後ろ向きで) アサ [麻] の種を蒔き、それに土を被せる仕草をしながら (熊手等を引きずりながら)、“Hempseed I sow, / Hempseed, grow. / He that is to marry me, / Come after me and mow.” (アサの実を蒔きます。/ アサの実よ育ておくれ。/ 私と結ばれる人よ、/ 私についてきて、刈り取っておくれ。)と何度か呪文を唱え、未来の結婚相手の姿が見えると言われる¹²⁾。この占いでは普通、娘がアサの種をこっそり持ち出すか、あるいは盗み出して占うと言われる。また、このとき夫となる人物は「鎌を手にして」現れるとも言われる。この姿についてはやはり、娘の蒔いたアサの種が成長し、それを夫が鎌で刈り取ろうとする姿ということになる。この占いは聖マルコ祭前夜の他に、夏至祭 (六月二十四日)、ハロイーン、クリスマス・イヴ等にも行われる。さらに、この占いは教会の庭やその周辺ばかりでなく、家庭の庭でも行われる。

英米の年中行事で、恋占いや結婚占いに最も結びつきをもつのはハロイーンであろう。ハロイーンにはリングを用いた占いが多いようである。

*ハロイーンに、ローソクを手にしてリングをかじりつつ鏡を見つめると、肩越しに将来の夫となる人が同じ鏡を覗く。Robert Burns, *Halloween* (1786) に次の用例が見られる。

Wee Jenny to her Graunie says, “Will ye go wi’ me, Graunie? I’ll eat the apple at the glass, I gat frae uncle Johnie.”¹³⁾

(おちびのジェニーが彼女のばあ様に言う。「一緒に行こうよ、ばあちゃん。わたい、

鏡の前でジョニーおじさんのくれたリングを食べるんだもん。])

*ハロイーンに、若い独身女性がリングをもって鏡の前に立ち、9つに切ったリングをナイフに載せて、鏡を覗き込みながら左肩越しに差し出すと、それを取ろうとして未来の夫の姿が鏡に映ると言われる。

*ハロイーンに一人で家を出て、3つの領地の境界が接している所を流れる小川まで行く。その水に自分の着ているシャツの左袖を浸し、誰とも話をせず家に戻る。濡れたシャツを寝室の暖炉の前に干しておき、火の見える所に横たわり眠らないでじっと見ていると、真夜中頃にシャツを裏返すために未来の伴侶が現れると言われる¹⁴⁾。

*9つの小葉をつけたトネリコの葉を見つけ、それを胸に入れて「まだ見ぬ恋人に巡り合えませうように」と呪文を唱える。すると夢の中に恋人の姿が現れる。

*西洋ノコギリソウ (yarrow) を採ってきて、「恋人 (伴侶) の姿が見られますように」と念じて枕の下に入れて寝る。これは五月祭の日またはその前夜に行われる。また、西洋ノコギリソウについては、若死にをした人の墓場から採ったものがよいとも言われる¹⁵⁾。

*聖アグネス祭 (一月二十一日) の夜、または前夜に、娘たちが夕食をとらずに (断食をして) 眠ると、夢の中に未来の夫の姿が現れると言われる。

*聖トマス祭 (十二月二十一日) の前夜に、娘たちが大きな (赤い) タマネギの皮をむき、枕の下に入れて寝ると未来の夫の夢が見られると言う。また、ダービーシア辺りでは、その玉ねぎにピンを刺すが、中央に恋人の名をつけて1本、その回りに8本、合計9本のピンを突き刺す。なお、恋占いや結婚占いに「ピン」が使われるのは、どうやら、「それで恋人の心をチクチク刺す」という意図からのようである。

*同様にピンを用いるが、ハトを殺し心臓を取り出し、それに多くのピンを刺して枕の下に入れ、後ろ向きに歩いてベッドまで行く。こうすれば夢の中で未来の夫の姿が見られると言う。

*剣と鞘を用いる結婚占いがある。夜中12時頃に教会の庭に入り、むき出しの剣を手に持ち、「ここに剣があるが、鞘はどこだ?」と言いながら教会の周囲を9周回ると、最後の9周目に未来の結婚相手が手に鞘を持って出迎えてくれると言われる。スコットランドの一部では、教会を3周回るとされ、毎回玄関の前を通るとき鍵穴に剣の先を突っ込んで前述の呪文を唱えるべきだ、と言われるようである¹⁶⁾。

*髪の毛を焼いて伴侶を占う。夜の12時から1時の間に、二人の乙女が二人きりで部屋に座り、互いに口をきかないままそれぞれが年齢の数だけ自分の髪の毛を抜き、それを恋人草と呼ばれる植物 [ユリ科ツクバネソウ] とともに麻布に包む。時計が1時を打つと髪の毛を一本ずつ火にくべる。そのとき「この犠牲を最愛の人に捧げます。どうかお姿を見せて下さい」と念じる。それぞれの乙女の伴侶の姿が本人だけに見えると言われる。

*靴下留めを用いる古いも実に多様である。その一例に、靴下留めに結び目を9つ作り、枕の下に入れて寝ると未来の伴侶の夢が見られる、という占いがある。

*乙女は自分の食べたニシンの背骨の下にある、長さ1.5インチくらいの粘着性の薄膜を水しっくい壁に投げつけ、そのくっついた形で恋人の容姿を占う。縦にくっつくのが一番よいとされる。

*イングランド北部では、金曜日遅くに摘んだ9枚の雌ヒイラギの葉を三角形のハンカチに入れ、9回結んで枕の下に入れて寝ると未来の配偶者の姿が夢で見られると言う。

*卵を固ゆでにして黄身を取り出し、そのあとに塩を詰める。夕食を食べないで寝る前にその卵を食べ、喉が渴いても何も飲まず、また誰とも口をきかずに寝る。こうして乙女は水を飲んでいる夢を見て、その容器の種類や状況から夫になる人物を占う。また、夢の中で未来の夫の姿そのものが見られるとも言われる。さらに、もし恋人が水を持って近くにいる夢を見た場合、乙女は振られることになるとも言われる¹⁷⁾。

(3) 相手の素姓—住まいの方角、結婚歴等—を知る占い

*リンゴの種を親指と人差し指の間にはさみ「私の恋人はどこにいるの。どちらの方角から現れるの。その口に飛び込んでおくれ」と唱えておいて両指で種を圧搾する。種は圧力がかかると外皮を破って飛び出す。その飛んだ方角が占いの答とされる。

*テントウムシ (ladybird) は恋人のほうに飛んで行くと言われる。若者たちはテントウムシを手の甲におき、それを放り上げて「さあ飛んで行け、私の恋人がどこにいるのか教えておくれ」と言って占う。

*結婚相手の素姓、特に結婚歴を知る占いがある。次は先掲の Burns, *Halloween* の注釈の記述である。

Take three dishes ; put clean water in one, foul water in another, and leave the third empty : blind-fold a person, and lead him to the hearth where the dishes are ranged ; he (or she) dips the left hand : if by chance in the clean water, the future husband or wife will come to the bar of Matrimony, a Maid ; if in the foul, a widow ; if in the empty dish, it foretells, with equal certainty, no marriage at all. It is repeated three times ; and every time the arrangement of the dishes is altered.¹⁸⁾

(3枚の皿を用意して、1枚にはきれいな水、2枚目には汚れた水、残りは空にしておく。占う人を目隠しして皿を並べてある暖炉の所へ連れて行く。彼(あるいは彼女)は左手を皿に浸す。それがたまたまきれいな水の皿ならば、婚姻届けの役所を一緒に訪れることになるのは初婚者であり、汚れた水の皿ならば再婚者、空の皿ならば、上記の場合と同様の確かさで結婚できないことになる。これは3度繰り返されるが、その都度3枚の皿の位置は変えられる。)

これもやはりハロイーンの夜の占い遊びの一つである。この占いはかつてはイングランド、ス

コットランド、アイルランド、ウェールズと、ほぼイギリス全土で見られ、また大西洋を越えてもたらされた結果、アメリカの特に北東部でも見られたようである。

(4) 相手のイニシャル、洗礼名、あるいは人物そのものを知る占い

* ウェールズの農家では、娘たちはクリスマス・イヴか十二日節（一月六日）の前夜祭の日に紡いだ最初の糸を戸口の外に張り渡しておく。その上を最初に歩いた男性の洗礼名が夫となる人物の洗礼名だとされる。

* 誰かの服についた糸切れをつまみ、人差し指に巻きつけながら一巻きごとにアルファベットを1文字ずつ言うと、最後の巻きで将来の結婚相手の男性のイニシャルが判る。

* 紙片にアルファベットを1文字ずつ書き、水の入った容器に文字面を下にして入れておく。朝、めくれている紙片の文字が夫となる人物のイニシャルだとされる。

* 耳鳴りがするときのイニシャル占いがある。主として女性による占いで、耳鳴りがしたらただちに誰かに数字を言うように頼む。その数に対応するアルファベットの文字こそが、自分のことを愛しく思っている男性のイニシャルなのだとされる。

* ハロインに、乙女がむいたリンゴの皮を次の呪文とともに左肩越しに後ろに投げれば、その皮が未来の夫のイニシャルを作る。“St. Simon and Jude, on your intrude, / By this paring I hold to discover, / Without any delay to tell me this day, / The first letter of my own true lover.”（聖サイモンとジュード様、お願いします。／手にもつこの皮で教えてほしい。／今日すぐにも教えてほしい、／ほんに愛しいお方のイニシャルを。）この用例に、D. H. Laurence, *The White Peacock* (1911) の記述がある。

She stood up, holding up a long curling strip of peel. “How many times must I swing it, Mrs Saxton?” “Three times—but it’s not All Hallow’s Eve.”¹⁹⁾（彼女は立ち上がった。手には長くねじれたリンゴの皮をもっていた。「何回振らなくてはいけないの、サクストン夫人。」
「3回よーでも、今日は万聖節の前夜ではないわね。」)

もしも投げた皮がちぎれて文字を作らなければ、その娘は独身で終わると言われる。

* リンゴの莖 [リンゴの頭部の凹部にある軸] をひねる度にアルファベットの文字を一つずつ言い続けると、莖が切れたときの文字が未来の夫のファースト・ネームのイニシャルとなる。セカンド・ネームのイニシャルについては、とれた莖でリンゴを突く度にアルファベットの文字を言い続け、莖が皮を破ったときの文字でそれを知る。

スコットランドの田舎には、妖しげな恋占いがある。

* ハロインの夜、一人で炉のところへ行き、通風管の中に青色の毛糸玉を投げ入れ、その糸を糸巻きに巻き取っていく。すると誰かがその毛糸玉を押さえているかのように糸が巻き取れなくなる。そのとき毛糸玉に向かって「誰が押さえているのか？」と問うと、通風管の中から

未来の配偶者の洗礼名か苗字が聞こえてくると言われる²⁰⁾。

次のものは、またしてもリングを用いてのハロイーンの恋占いであるが、特にスコットランドでは今日でも子供たちの遊びとして残っている。

*たらいのような容器に水を入れ、多くのリングを浮かべ、そこに顔や手足を突っ込んでそのうちの一つを口にくわえる。くわえたリングの持ち主がその者の恋人である。ウェールズでは水の中にコインもいっしょに入れる。この遊びは、水の中にひょいと頭を潜らせるので‘duck apple’（水中リングくわえ遊び）と呼ばれる。

*この類型に、容器の水の中のリングを、口にくわえたフォークで突き刺して占うものがある。これは‘forking for apples’（リングのフォーク刺し遊び）と呼ばれる。

上記2つの古い遊びは、ドルイド僧²¹⁾の行う宗教儀式に由来するものと言われており、水の中を通して「リングの国」つまり「不死の国」へ行くことを象徴している。ここでのリングは〈不死〉(immortality)の表象なのである²²⁾。

*やはりリングを使ったものに‘bob apples’（吊しリングくわえ遊び）がある。多くのリングを糸や細いひもに吊しておき、目隠しをしてそれを口でくわえる占い遊びである。

(5) 相手の職業、身分、地位、貧富、さらに将来の運勢の占い

娘たちは未来の夫の職業、身分、貧富等を占う。

*デイズィの花びらをむしり取りながら、“Tinker, Tailor, Soldier, Sailor, Rich man, Poor man, Beggar man, Thief.”（鋳かけ屋、仕立て屋、兵士、水夫、金持ち、貧乏人、乞食、泥棒。）と繰り返し、最後の花びらに相当する文句で判定する。これは英米の最もポピュラーな結婚占いの一つと言えよう。

*コップまたは容器に水を入れておいて、その中に卵の白身を数滴垂らし、白身が水に浮いて作る形から将来の夫の職業—例えば、船の形なら夫は水夫とか—また生まれてくる子供の数などを占う²³⁾。

*これに類似した占いがある。ハロイーンの夜などに、古いスプーンに鉛くずを入れて暖炉で熱すると鉛が溶けるので、それを玄関の鍵の刻み目を通して冷水の入った容器に垂らし込む。その後、冷えて容器の底に沈んだ鉛の形から未来の夫の職業を占う。

*ハロイーンの夜、一人で納屋に行き2つの戸口を開けておく。そして、み[箕]を手にして風の吹く方角を考えて、まるでモミが入っているかのように揺すってモミガラを風で飛ばす仕草を3回する。そのとき風の入ってくる戸口から人影が入ってきて、もう一方の戸口から出て行く。人影は未来の伴侶であり、風采、職業、身分等が判るとされる²⁴⁾。

*紅茶（コーヒー）カップでの恋占いがある。一般的には若い女性が行う占いであるが、紅茶かコーヒーを全部飲み干さないでわずかにカスが残る程度に残し、左手の中で3回時計と逆方向に回し、ゆっくりと受け皿の上にひっくり返す。カップの中を見ると絵や印—例えば、牛馬、馬車、城などの形—が見え、それで未来の夫の職業、身分、地位、貧富、その他運勢等を

占う。これはいわゆる「カップ占い」(‘reading the cups’)の一つである。なお、カップをひっくり返したあとで3回回すという方法もある²⁵⁾。この用例として、Oliver Goldsmith, *The Vicar of Wakefield* (1766)の次の一節がある。

The girls themselves had their omens. ... and true-love-knots lurked in the bottom of every teacup.²⁶⁾ (若い娘たち自身が縁起担ぎをした。…本当の縁結びは、すべての紅茶カップの底に潜んでいた。)

ここで言う‘love-knot’とは、「(愛のしるしの)縁結び、恋結び」の意である。

(6) 総合的内容を含む恋占いと結婚占い

* キャベツを用いた占いがある。Burnsは先掲の*Halloween*の注釈でこの占いについて説明している²⁷⁾。その要点は次の通り—若い男女が数名で手をつなぎキャベツ畑へ出かけ、目隠しで各自がキャベツを1つずつ引き抜く。その茎が大きい小さいか、真っ直ぐか曲がっているかで結婚相手の体格や容貌を占うが、大きくて真っ直ぐなのが吉とされる。次に根についている土の多少で貧富を占うが、多いほうが吉である。次にナイフで茎の芯を切り、口に入れてその味を試す。甘い味がすれば吉で、相手は好人物と判じる。最後にそのキャベツの茎—「ラント」(‘runts’)と呼ばれる—を家に持ち帰り、戸口の上辺りに並べて置く。そして、偶然家に入ってくる人物のクリスチャン・ネームが、「ラント」を置いてある順で、その者の結婚相手のクリスチャン・ネームだとされる。

2 恋占い、結婚占いに付随する迷信、俗信

古来、恋占いや結婚占いにはそれに付随する多様な迷信、俗信がある。これらはいわゆる「占い」とはいくぶん性質が異なるものであり、場合によっては、それは恋や結婚が成就するように意図した「まじない [呪い]」であり、また場合によっては、裏切られた恋人への憎しみ、つまり「のろい [呪い]」の類でもある。

* 「バターができない時には、誰かが恋をしている」と言われる。例えば、Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* (1891)で「バターがどうしてもできない」ことに関して、酪農屋クリックのおかみさんの次のような言葉が見られる。

“Perhaps somebody in the house is in love,” she said tentatively. “I’ve heard tell in my younger days that that will cause it. Why, Crick—that maid we had years ago, do ye mind, and how the butter didn’t come then——”²⁸⁾

(「多分この家の誰かが恋をしているんだわ」と彼女はためらいがちに言った。「若い頃それが原因でそうなるって聞いたことがあるわ。ほら、クリック——何年か前にうちに

いたあの娘、いいかい、あの頃どんなにバターができなかったことかねえ——」)

* 「家の中にチョウ (butterfly) が入ってくると婚礼に近い」と言われる。チョウについては、それは〈愛〉の表象と見ることができる²⁹⁾。

* 「4人が手を交差させて握手するのは結婚の前兆である」と言われる。また、「この場合、結婚するのは4人の内の一人である」とも言われる。

* 「金曜日には結婚の申し込みをしないほうがよい」とされる。もしそんなことをすれば、それを知った周囲の人々から「罪深いこと」として騒ぎ立てられ、フライパンや鍋をたたいて追い回されることになると言われる³⁰⁾。

* 「花嫁に触れる乙女、また、花婿に触れる若者は早いうちに結婚できる」とよく言われる。現在でもこの俗信は「縁起担ぎ」として、いろいろな形で実際に行われている。

* 「女性の靴下留め (garter) がずり落ちると、夫や恋人が自分から離れて他の女性に走るし」と言われる。ところがこの俗信については、逆に「靴下留めがずり落ちると、恋人が彼女のことを愛しく思っているし」との信もある。

次の俗信は、恋人の心を繋ぎ留めておくための一種の「まじない [呪い]」である。

* 「乙女はその下でキスをされたヤドリギの実と葉を採って寝室に行き、実は飲み込み、葉には愛する人のイニシャルを彫りつけ、コルセットの内側の心臓部に縫い込んでおく。これでその葉がそこにある限り、恋人を縛りつけておくことができる」と言われる。

* 「乙女がハトの心臓を取り出しハトの命を奪えば、愛する男性に無理やり自分と結婚させることができる」とされる。

「愛と憎しみは表裏一体のもの」とよく言われるが、次の俗信は恋する相手に裏切られた場合の、恋人へのいわゆる「のろい [呪い]」である。

* 「ウサギの心臓にピンをたくさん刺して新しい墓穴のそばに埋めておけば、不実な恋人の健康を次第に損なわせて、最後には恋人の命をも奪うことができる。」³¹⁾これは特にリンカンシアの俗信とされるが、これに類似したいろいろな呪いが英米の各地で密かに伝えられていることであろう。なお、ここで用いられるピンについては、勿論、それはもはや先述のような恋人の心を刺激するどころのものではなく、恋人の心臓 [生命] に止めを刺すためのまさに凶器なのである。

[次号に続く。]

Acknowledgements :

貴重なご教示をいただいた Amy R. Staley 女史 (中国短大講師) に感謝申し上げます。

Notes

1) "Dandelion or Hawkweed Seeds: Divination," *A Dictionary of Superstitions*, ed. Iona Opie & Moira Tatem (1989; Oxford: Oxford UP, 1990) 114.

2) "The Legend of Good Women," Text B, 183-85, *Chaucer Complete Works*, ed. Walter W. Skeat (1912; Oxford:

- Oxford UP, 1969) 354.
- 3) "Marigold," [俗信・俗習], 『英米文学植物民俗誌』, 加藤憲市著 (1976; 東京: 富山房, 1984) 344.
- 4) "Marigold," *Folklore of Shakespeare*, ed. T. F. Thiselton Dyer (England, 1883; Massachusetts: Corner House, 1983) 231.
William Shakespeare, *Cymbeline*, ii. 3. 23, The Arden Edition of *The Works of William Shakespeare* (Paperback), ed. J. M. Nosworthy (1969; London: Routledge, 1991) 54.
... winking Mary-buds begin to ope their golden eyes; ...
- 5) "Knots in Grass: Divination," Opie & Tatem ed. 222 (R).
- 6) "Nine," 1, *Dictionary of Symbols and Imagery*, ed. Ad de Vries (Amsterdam: North-Holland, 1974) 342 (L).
- 7) "Number," *Zolar's Encyclopaedia of Omens, Signs & Superstitions*, ed. Zolar (London: Simon & Shuster, 1989) 273.
- 8) "Bible and Key: Divination," Opie & Tatem ed. 24 (L).
- 9) "The Song of Solomon," VIII. 7, *The Holy Bible* (A.V., 1611; Oxford: Oxford UP, 1985).
- 10) "Bible and Key: Divination," Opie & Tatem ed. 24 (L).
- 11) "Ash," *Folklore* 6, De Vries ed. 25 (L).
- 12) "Hempseed," *E. & M. A. Radford Encyclopaedia of Superstitions*, ed. Christina Hole (1948; London: Hutchinson, rev. 1961) 189.
- 13) "Halloween," 109-12, *Burns Poems and Songs*, ed. James Kinsley (1969; Oxford: Oxford UP, 1970) 126.
- 14) "Halloween," Zolar ed. 186.
- 15) "Yarrow," Hole ed. 368.
- 16) "Sword and Scabbard: Divination," Opie & Tatem ed. 388-89.
- 17) "Salt in Egg: Divination," Opie & Tatem ed. 343-44.
- 18) "Halloween," Footnote, Kinsley ed. 130.
- 19) D. H. Lawrence, *The White Peacock*, I. VIII, The Cambridge Edition of *The Letters and Works of D. H. Lawrence*, ed. Andrew Robertson (Cambridge: Cambridge UP, 1983) 92.
- 20) "Halloween," Footnote, Kinsley ed. 125.
- 21) "Druids," *The Encyclopedia Americana*, International Edition (1829; USA: Grolier, 1993).
[Abstract] ... a religious order among the ancient Celts of Gaul, Britain, and Ireland. ... Druidical functions included arbitration, pronouncements on matters of public policy, enchantment, divination, and sacrifice. The Roman historian Pliny, in his *Natural History*, described the druidical rite of cutting mistletoe from an oak and also mentioned the ritual sacrifice of a pair of white bulls. ...
- 22) "Apple," *An Illustrated Encyclopaedia of Traditional Symbols*, ed. J. C. Cooper (1979; London: Thames and Hudson, 1993) 14.
- 23) "Eggs," Hole ed. 150.
- 24) "Halloween," Footnote, Kinsley ed. 128.
- 25) "Tea / Coffee Cup, 'Reading'," Opie & Tatem ed. 391-92.
- 26) Oliver Goldsmith, *The Vicar of Wakefield*, X, Everyman's Library 295, Fiction (1908; London: J. M. Dent & Sons, 1961) 51.
- 27) "Halloween," Footnote, Kinsley ed. 123.
- 28) Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles*, XIII, The New Wessex Edition, ed. P. N. Furbank (1891; London: Macmillan, 1975) 160.
- 29) "Butterfly," *Dictionary of Mythology, Folklore and Symbols*, ed. Gertrude Jobes (New York: Scarecrow, 1962) vol. 1, 263 (L).
- 30) "Friday, Courting on," Opie & Tatem ed. 168.
- 31) "Heart Stuck with Pins: Lover's Spell," Opie & Tatem ed. 196.

Speculation Concerning Superstitions in the Cultural
Background of the English & the Americans –(6)
Ⅲ LOVE AND MARRIAGE Part 1 : On the Customs and
Superstitions of the Divination of Love & Marriage

Kunihiro FUJITAKA

Faculty of the College of Liberal Arts and Science,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan

(Received September 30, 1997)

It could be safely said that love and marriage are among the most interesting and influential matters in people's lives. People hope to be very lucky and meet and marry the best type of life partner. As an outer expression of their wishes, people have put a variety of divination of love & marriage into practice since time immemorial.

When we research this kind of divination, we come to notice that most of the divination has been practiced at Halloween. As an example of the divination on the midnight of Halloween, we can mention a well-known divination, in which if a young lady eats an apple while standing before a mirror with a candle in her hand, her future husband will appear and look into the same mirror over her shoulder. Moreover, we can cite the following passage from Robert Burns's poem *Halloween* (1786) as a literary example of this divination: "Wee Jenny to her Graunie says, 'Will ye go wi' me, Graunie? I'll *eat the apple* at the *glass*, I gat frae uncle Johnie.'" [*Halloween*, 109–12] We wonder how this divination was begun, and also why such special things as apples and glasses have been needed for this divination.

In this paper, we will list many other sorts of divination, and speculate on the origins, reasons, effects, etc., exemplifying the practical usages from English literary works. We will be pleased to a great extent if this speculation about the divination of love & marriage helps us have a better understanding of the ways of thinking and behaving of English-speaking people.